

翻訳にあたってのヒント

その 66

訳文はできるだけ短く簡潔に？

我々日本人が英語を書く場合には、「3Cs (clearness, correctness, conciseness [明快性、正確さ、簡潔性])」だとか「5Cs (correct, clear, concise, complete, courteous [正確であること、明瞭であること、簡潔であること、完全であること、礼儀正しいこと])」を心がけ、なるべく短く簡潔に書くようにという教え方が日本の英語教授法では常套手段となっている。ごちゃごちゃと長たらしい日本語や英語を、短く簡潔に書けば、確かに英米人読者や日本人読者にとっては読みやすい英語や日本語になることには間違いない。しかし、翻訳の目的とは原文に比べ訳文をなるべく短く簡潔にするということではないはずであり、突き詰めれば翻訳の目的とは、原文の意味を目標言語で忠実に再現するということであることに疑いの余地はない。これを曲解したあまり、原文は長い、訳文では短くなっている翻訳は、果たして忠実な翻訳文と言えるのだろうか。筆者は断じてそうではないと断言する。例えば、原文に比べ短く簡潔であるが明快さと分かりやすさに欠ける訳文、あるいは原文に比べ多少長いがその意味を忠実に再現している分かりやすい訳文があるとしたら、どちらがいい訳文であるかは自明の理である。前者は簡潔であるが明瞭さ明快さと正確さに欠けており、後者は正確で明瞭で完全であるからである。極端な例としては、日本語ではわずか3字である「あげる」(主語はおろか、間接目的語も直接目的語もない!)を英語にすれば、「I give it to you.」や「I give you it.」となるように10文字から12文字になるということがあげられる。分かりやすさや明快さそして正確さをないがしろにして単に短さや簡潔さだけを目標にして書かれた訳文は意味がぼやけてしまい、いい訳文にはならないはずである。

まず一例として「dare (助動詞)」と「dare to do ... (動詞扱い)」という英語を引き合いに出すことにしよう。「I dare say he is bad.」という英文があるとする(dare say は daresay と短縮して書かれることもある)。この「dare や dare to do ...」の正確な意味は、「感情に反する行為や意志」を表し、自分が感じていることに反することを述べたり、「あえて～する、思い切って～する」のように現在の感情に反する行為を行ったりする場合に使われる表現である。そうした意味から粗く和訳すれば、「あえて言えば、彼はきっと悪いのだろう」というような訳文になるだろうが、もっと厳密に訳出すると「あまり言いたくはないが、あえて言えば彼はきっと悪いのだろう」「誰が何と言おうとも、彼は悪いのだと断言する」という意味合いの訳文になるはずである。また「How dare you did it?」といった英文も、「よくもそんなことをしでかしたもんだね」というよりは、「よくも凶々しく(厚かましくも)そんなことをしでかしたもんだね」とした方が dare のニュアンスが出るということもある。

次にとりあげるのは「so」。文頭に来た場合には、「で、では」などの訳文が当てはまる場合もなきにしもあらずであろうが、その前にある前置きの文章によっては、「これでお分かりのように、こうした（背後）事情から、以上の話により、こんな訳で、ということは、要するに、そのように、したがって、…等々」のように、わずか1語の英語でも日本語にすると10字以上からなる日本語が当てはまる文脈であることが往々にしてある。

最後に「terror」という「テロ（テロ行為）、つまり政治的目的の破壊活動；恐怖；恐怖の種」を表す英語が軍事的意味で「民間人に対する無差別攻撃」を指すことがあり、「It was a terror.」という英文が「それは恐怖でした」ではなく「それは民間人に対する無差別攻撃でした」というように軍事的目標に限定しない意味になる場合があるということも記しておこう。

◆ 豆知識

軍事用語がでたついでに話が飛ぶが、「action」という英語は、「行動、活動」のほかに「交戦、戦闘、射撃用意」といった意味がある。具体例としては「an encounter action」「a naval action」「be in action」は、それぞれ「遭遇戦」「海戦」「交戦中」の意味。また「be killed in action、fall in action」は「戦死」という意味であるが、戦時中でも交通事故や不慮の事故で亡くなった場合は「殉職」となる。「theater」ともなれば「戦場、戦域、米国本土、正面（海上自衛隊用語）」の意味もある。シンプルな英語だからといって、なめてかかっている例として採り上げておく。こうなると、簡潔さどころではなく、正確さが翻訳の要となる。

以上これにて第66回目終わり。